

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより

第32号

2019(令和元)年8月26日

(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

早糸の作り方 — 知多木綿の里・愛知県知多市岡田を訪ねて —

糸車にかける早糸(はやいと)にも、作り方があることを初めて知りました。早糸とは「糸車と紡錘(つむ)とにわたしかける糸。調糸。早緒。早麻(はやそ)。」(『日本国語大辞典 第二版』小学館発行)のこと。随糸と呼ぶ地域もあります。これまでは市販のタコ糸を用いてきましたが、その太さや質にも気を配る必要があることは本誌第26号に記したとおりです。

ところで先日、知多木綿の一大産地であった愛知県知多市岡田を訪ね、手織り技術の伝承に取り組んでおられる「木綿蔵・ちた」を見学させていただいた折のことです。案内して下さった方との何気ない雑談の中で、早糸にかかわる悩みをお話させていただいたところ、その方は目の前で即座に早糸を作って見せてくださいました。結び玉のない早糸を、です。

「この早糸は、手紡ぎの糸で作るのですか？」とお尋ねすると、「そうですよ」とのこと。あらためて考えてみれば、藁や糸を日常的に編み、紡いでいた江戸時代の人々にとっては、糸を自分で調えることは当然のことであったでしょう。「タコ糸」というものが独立して存在していたわけではありません。

「糸は結ばなくても撚るだけで繋がり、強度を増すことは、手紡ぎされている方であればよくご存じのはずですよ」と言われ、これもまた目からウロコが落ちるような思いがしました。

言葉だけで説明しても理解不能であることを承知の上で、あえて記録を兼ねて以下に早糸の作り方をまとめてみます。『知多木綿 織りの技術4訂版』(知多市歴史民俗博物館 平成27年発行 P7)参照。

- ①糸車に糸をかけ、完成したときの長さ分だけの糸をとる。仮にA～Bとする。
- ②さらに、糸車の円周の4分の1ほどの長さを足し、仮にCとする。
- ③Cを起点に折り返し、 $[A \sim C] \times 2$ の位置で糸を固結びする。この小さな結び目をDとする。
- ④ $[A \sim C] \times 2$ の糸の輪を、軽く左足(右でも良い)の足裏で踏むように押さえる。糸の纏れに注意する。
- ⑤ $[A \sim C] \times 2$ の糸の輪を、目の前で回転させながら糸をどんどん繰るように重ね、糸の本数を増やす。
- ⑥糸の太さにもよるが、およそ4回転ほどしたところで糸を切る。回転数はDの結び目でカウントする。
- ⑦出来上がった輪の片方を頑丈な棒にかけ、片方の輪に藁(もしくは太いヒモのようなもの)を差し込み、その藁をV字に折り、両手の平で揉むようにして糸に撚りをかけていく。反対側の棒にかけた糸の輪が小さくなるまで撚りをかけつづける。撚りがかかると糸は短くなるが、ここで円周の4分の1の糸が生きる。
- ⑧両方の輪を左手の人指し指にかけ、2つの輪に新たな糸をかけ、先程のDのように固結びして、小さな輪をつくる。この結び目を目印に、本体の糸と同じ本数になるまで糸の輪を回転させてから、糸を切る。切った糸を結ぶ必要はない。
- ⑨指から両方の輪を外して大きな一つの輪にすれば、自然に撚りがかかって結び目のない輪ができる。厳密に言えば、小さな結び目が2つあるが、ほとんどわからない。

教えてくださったのは会の代表、関 智子氏です。まるで手品を見ているような鮮やかさでした。



「手織りの里 木綿蔵・ちた」の外観

----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 令和元年7月24日～8月23日)

0

【H.A.M.A. 木綿庵】(令和元年7月24日～8月23日)

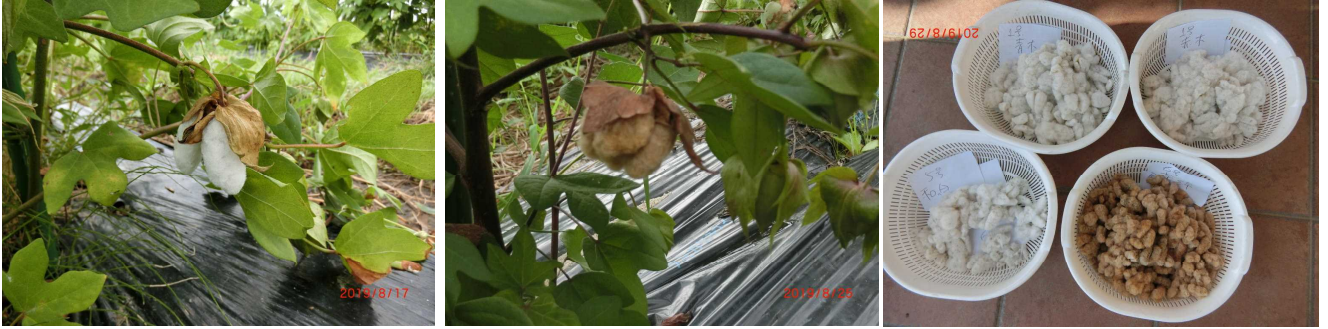
メールを含む各種相談件数2、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数0名



《綿の栽培記録 2019》 — 平成31年(令和元年)度版 その7 —

8月中旬を迎えて、いよいよ綿が吹き始めました。今シーズン初めて開絮(かいじょ)を確認したのは1号畑の和綿で、8月14日でした。赤木です。台風10号の襲来に備えて、倒木対策をしているときに見つけました。5号畑でも8月17日に和綿の白綿の開絮を確認。また、6号畑では和綿の茶綿の開絮を8月25日に確認しました。いよいよこれから本格的な綿摘みのシーズンを迎えます。なお、今のところ洋綿の白綿、茶綿、緑綿の開絮はまだ確認できていません。

写真は上段左：1号畑和の赤木の開絮の様子、中：6号畑和の茶綿の開絮の様子、右：品種別に籠を分けて収穫した綿花



《草木染め：紅花染めと藍の生葉染め — 令和元年8月10日、13日》

7月に摘んでおいた紅花の花400gを用いて、8月10日に紅花染めをしました。まず最初に抽出した黄汁液で手紡ぎ糸50gとハンカチ50gを染め、次に赤色を抽出し、炭酸カリウムとクエン酸を加え、手紡ぎ糸50gとハンカチ50gを染めました。媒染剤は椿灰の灰汁。アルミ媒染です。どちらも予想以上に綺麗な色に染まりました(下段写真：左)。

8月13日には、摘み取ったばかりの藍の生葉600gを用いて、手紡ぎ糸200gとハンカチ100gを染めました。こちらは媒染なしです。少しくすんだような、味わいのある薄い空色に染まりました。その一部を、翌日にもう一度同じ工程で重ね染めしてみました。色はたしかに深くなりました(下段写真：中)。

《松阪市立歴史民俗資料館、知多市歴史民俗博物館ほかを訪ねて》

夏休みを利用して8月16日に、松坂木綿の発祥地である三重県松阪市を訪ね、松阪市立歴史民俗資料館、松阪もめん手織りセンター(下段写真：右)、三井家発祥の地などを見学。8月24日には知多木綿で有名な愛知県知多市を訪ね、知多市歴史民俗博物館、木綿蔵ちた、伝承知多木綿つものき、などを見学。いずれの地でも手織り技術を伝承されている方々から貴重なお話を聞かせていただくことができました。

【綿の加工の作業記録】 (梅田 1人の作業量)

- 糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿：平成29年, 2017産。丹羽正行氏による打ち綿)

7月24日～8月23日 (作業実日数12日) 糸の総量55.2g (14.7匁) 総時間132分 (2時間12分)

※1分間≒0.418g 1時間≒25.1g (6.7匁)

【研修等の記録】

- 令和元年08月16日 「松阪もめん手織りセンター」、「ゆうづるの会」(三重県松阪市本町) 訪問、見学
- 令和元年08月16日 「松阪市立歴史民俗資料館」、「本居宣長記念館」(三重県松阪市殿町) 訪問、見学
- 令和元年08月24日 「知多市歴史民俗博物館」(愛知県知多市緑町) 訪問。手紡ぎ手織り体験に参加
- 令和元年08月24日 「木綿蔵・ちた」、「伝承知多木綿つものき」(愛知県知多市岡田) 訪問、見学

